

介護の女神

最優秀賞

中山 恵美代様

彼女の最初の患者は私だった。脳出血で倒れ、右半身麻痺となった母の、動かない右手をミーちゃん、左手をヒーちゃんと呼び、笑顔で励まし続けた。だから私も笑った。でも、娘が介護職を選んだ時、正直複雑な気持ちだった。「お母さん、今日はね入浴と排泄を教えてもらったよ」「頑張っていて偉いね」電話を切って涙が溢れた。排泄という言葉が、耳から離れない。なんでうちの子が、知らない誰かのお尻を拭いているの？と。でもまた元気な報告の電話は来る。認知症のおばあちゃんは、なくした物を探す時、探検家みたいで可愛いとか、無表情なおじいちゃんにウィンクを教えた事。「100歳のおばあちゃんが長生きの秘訣は、なんでもありがたいの心じゃよと言っていたよ」等。「今日はね、おばあちゃんが靴下を右左反対にはいてしまい、恥ずかしくて泣いていたら、優しい先輩が、パパッと自分も靴下を反対にはいて、あれ？僕も反対だった！アハハって、みんなで笑ったんだー」と。こっちまで笑い声が聞こえる様な、温かい現場。

いつしか、私は楽しい介護の電話を待つようになった。大変な事や辛い事も多いはずなのに、なんでも面白い話にしてしまう。帰ってくるたびに、腕が太くなって、でも貴女は、日に日に輝きを増す。「きっと、私もいつか、誰かにお尻を拭いてもらう時が来るんだよね」貴女は介護の女神。

愛ある介護士達のその誇り高きお仕事を、今、私は心から尊敬している。

